

日本周辺国際魚類資源調査委託事業

津本欣吾・岡本楠清・松尾剛平・柴原浅行・谷水宗美・中村明菜・松本恵佑

目的

2000年9月「中部及び西部太平洋における高度回遊性魚類の保存管理に関する条約（WCPFC）」が採択され2004年6月に発効された。我が国も2005年7月に本条約に加盟した。これに伴い、日本周辺に分布するカツオ・マグロ類も国際的な枠組みのもとに管理されることとなった。こうした情勢の中、日本周辺を回遊するカツオ・マグロ類について、資源量評価やその動向予測、我が国周辺への来遊量の予測等に不可欠な科学的情報を収集、整理することを目的に、水産総合研究センター国際水産資源研究所を中心とする全国的な組織のもと実施された。この中で、本県は県内所属船によるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物的特性に関する情報収集に当たった。

方法

沿岸小型船（竿釣り・曳縄・延縄漁業）によるカツオ・マグロ類（クロマグロ、キハダ、メバチ、ビンナガ）の県内主要水揚港である和具、浜島、宿田曾、紀伊長島、尾鷲港と大中まき網漁業による水揚げのある奈屋浦港の計6港において、漁業種類別の水揚量調査を実施した。また、浜島、贄浦、奈屋浦、尾鷲の各港においてはクロマグロを対象に漁獲物の魚体測定を実施した。

一方、近海・遠洋における中型・大型竿釣り船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会及び近海漁労通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿（QRY情報）」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数及び漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況の関連等について検討を行った。

結果および考察

収集したQRY情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣り漁場の変遷を「三重県竿釣りカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲状況及び魚体測定データは（独）水産総合研究センター国際水産資源研究所に報告し、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価や来遊量予測を行うための根拠として活用された。得られた資源評価や来遊量予測の結果については、県内の関係漁業者、団体に情報提供した。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細は関連

報文で報告されるので、ここでは本県所属船の2011年漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況経過について概要を報告する。

1. ビンナガ漁況

1) 中型竿釣り船

QRY情報に基づく2011年の三重県中型竿釣り船によるビンナガ漁獲量は3,509トンで、前年（2,298トン）の153%、平年（2,061トン、1991～2010年平均）の170%の水準となった（図1）。

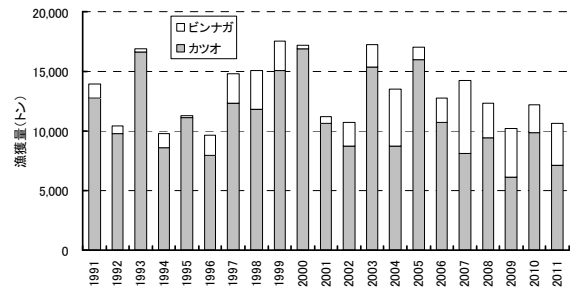


図1. 三重県中型竿釣り船によるカツオ・ビンナガ漁獲量の年変動

2) 大型竿釣り船

QRY情報に基づく2011年の三重県大型竿釣り船によるビンナガ漁獲量は4,009トンで、前年（4,734トン）の85%、平年（9,517トン、1992～2011年平均）の42%にとどまる低調な漁況となった（図2）。

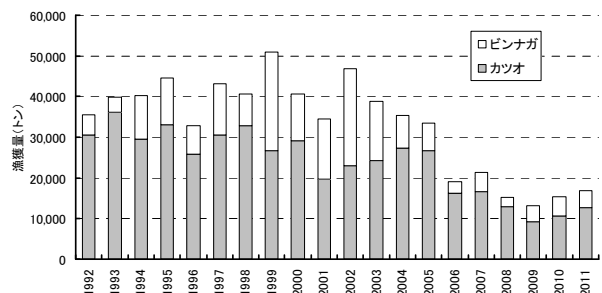


図2. 三重県大型竿釣り船によるカツオ・ビンナガ漁獲量の年変動

2. カツオ漁況

1) 沿岸小型船

三重県主要4港（和具・浜島・長島・尾鷲）における沿岸小型船（曳縄・竿釣）による2011年のカツオ総水揚量は336トンで、前年（531トン）の63%、平年値（1992～2010年平均：940トン）の36%と1992年以降で2006年（235トン）に次ぐ2番目に低い漁獲となった（図3）。期間を通して熊野灘沿岸での漁場形成は散発的で、県内小型船によるカツオ漁況は、終始低調に推移した。特に沿岸域で操業する曳縄は総水揚量20トンと低調であった前年（207トン）の1/10にも満たない低調な漁況であった。3～5月の漁獲主体は銘柄「中小」（体重1.5～2kg）～「中」（2～3kg）、6～9月は「中小」～「特大」（4kg以上）の幅広い銘柄の魚が水揚げされ、10月以降は曳縄では「小」（1～1.5kg）～「中小」、竿釣では「大」（2.5～4kg）～「特大」主体となった。

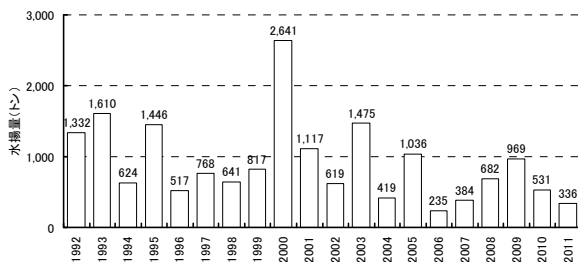


図3. 三重県主要4港（和具・浜島・長島・尾鷲）における沿岸小型船（曳縄・竿釣）によるカツオ水揚量

2) 中型竿釣船

QRY情報に基づく三重県中型竿釣船による2011年のカツオ総漁獲量は7,116トンで、前年（9,854トン）、平年（1987～2010年平均：10,769トン）の66%の漁獲量となった（図1）。操業は1月下旬より硫黄島周辺海域で始まった。2月には西ノ島周辺にも広がり、3月にはさらに北西（25～30°N、135～140°E）に広がり、潮岬沖でもビンナガ主体に操業がみられた。4月に入ると漁場は伊豆列島沿いに北上したが、沖ノ島周辺や南西諸島周辺でも操業した。5月に入ると、漁場は伊豆列島海域～房総半島東沖に収斂し、5月下旬以降はビンナガ主体に紀南礁～伊豆列島、房総半島東沖の黒潮統流域まで広く操業した。7月下旬以降カツオ主体となり、三陸沖33～40°N、150～154°Eを主体に操業した。9月以降はやや沿岸より145°Eまでが漁場となり、11月下旬まで操業し、終了した。

3) 大型竿釣船

QRY情報に基づく2011年の三重県大型竿釣船によるカツオ総漁獲量は12,810トンで、前年（10,649トン）は上回ったものの、平年（24,265トン、1992～2010年

平均）の53%と近年並の低調な漁獲量となった（図2）。

2006年以降の漁獲量の減少は三重県所属の大型竿釣船の隻数の大幅な減少（2005年：20隻、2006年：12隻）に起因するところが多い。本年度の年間CPUE（1日1隻あたりの漁獲量）は6.8トンと前年（6.3トン）、前々年（4.4トン）を上回った。

3. クロマグロ漁況

三重県内主要6港（和具、浜島、宿田曾、奈屋浦、紀伊長島、尾鷲）における2011年のクロマグロの総水揚量は41トンで、前年（18トン）の241%、平年値（50トン、1995～2010年平均）の83%となった。漁獲の主体は定置網とまき網で、それぞれ水揚量の48%、42%を占め、次いで沿岸カツオ一本釣り（6%）が多かった。

一方、夏季に行われる養殖用種苗のヨコワ（0歳魚）漁は、7月下旬に本格化し、8月上旬にはほぼ終了した。

関連報文

平成23年度国際資源対策推進委託事業「日本周辺国際魚類資源調査」報告書、（独）水産総合研究センター。平成23年度三重県竿釣りカツオ・ビンナガ漁況総括、三重県水産研究所。